

丸亀で会いましょう

認め合う家族だからこそできる
大規模農業

綾歌町で、父母・後継者の息子夫婦・その子ども2人の計6人家族で暮らす、永井さんにインタビューしました。

家族経営協定締結農家

永井 孝さん・里恵子さん（父母）
永井秀夫さん・昭代さん（息子夫婦）

■作付面積：18ヘクタール
（およそ丸亀競技場のサッカーグラウンド25面分）



●農業者として技術を習得する方法

父の孝さんは、農協・近所の先輩方から栽培技術を学び、23～24歳の時に就農し、後継者の秀夫さんは、4～5年サラリーマンを経験した後に就農。父と同じく指導してもらいながら、独立されています。

母の里恵子さんは、結婚した当時、農業をされていなかったのですが、いろいろと大変だったけれど、それでも見よう見まねで何とかやってこられたとのこと。一方、妻の昭代さんは、実家が兼業農家で、自分のおばあちゃんの手伝いをしていた経験を活かしながら、里恵子さんにも教わったそうです。「あそこが悪いとか言われることもないので、一応出来ているってことかな」と義母を見ながら、笑顔で答えてくれました。

●農業で生計を立てる工夫

収穫、苗つけの時期を農作物別に上手く組み合わせ、安定した収入を得られるように工夫し、

家族みんな	水稻・麦類
父 母	レタス・キュウリなど
息子夫婦	アスパラガス・ニンニクなど

水稻・麦類は、家族みんなで作業をしますが、野菜類の栽培は、各夫婦で農作物を別々に決め、夫婦のペースで仕事をしているそうです。

永井さんご一家は、物静かだけれども誠実な男性陣、明るく前向きな女性陣、それぞれが、お互いを認め合っているからこそ、役割分担などのバランスが取れているようです。広大な土地を4人だけで作業するのは大変だと思いますが、息子の秀夫さんは「妻と作業をすると、全てを話さなくても、お互い何をするのが良いか分かり合っている」と家族経営のメリットも話されました。

息子の秀夫さんが、就農する際、自分の収入は自分の収穫物からと取り組まれたのが、現在の家族経営スタイルにつながっています。

●農業の難しさ

農業は、年中忙しく、気候に影響を受ける大変な一面があります。取材に伺ったときも、暖冬の影響で、次々とレタスが育ち、収穫期間が1ヶ月短くなったと言われていました。収穫は朝の5時くらいから10時の出荷までに選別と箱詰め作業をこなし、野菜によっては、夕方にもう一度収穫するものもあるそうです。

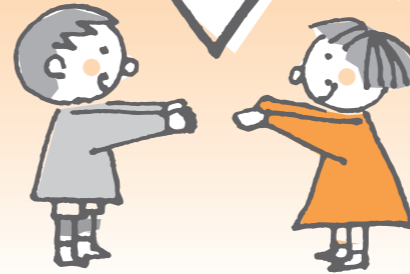
●家族経営で気をつけていることなど

昭代さんは、秀夫さんが収穫作業をしているときに、子どものお弁当作りや家のことも担当していますが、農家では、仕事と家事が別々ではなく、家事も仕事と認められているので、農作業を抜けて家へ戻っても、精神的な負担が少ないようです。

ゆっくり休むことは難しいようですが、夫婦それぞれで仕事の合間時間をつくり、リフレッシュしたり、家庭菜園で作った野菜で食卓を飾ったり、ときには一家揃って焼肉を食べに行ったりするそうです。

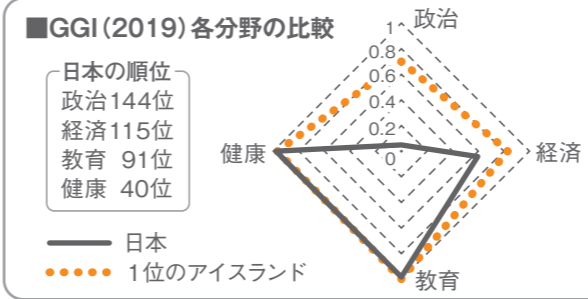


第43号



高校生に聞きました

生活の中にある政治と男女共同参画



昨年12月に世界経済フォーラムが、男女格差の大きさを政治・経済・教育・健康の各分野で数値化し、ランク付けする「ジェンダーギャップ指数(GGI)」を発表しました。

日本の順位は153か国中121位という結果(過去最低)でした。左図のチャートでも明らかのように、最大要因は政治分野での格差です。男女共同参画社会を進めるにあたり、何が課題なのか、高校生の座談会・子育て期の保護者アンケートを通して、一緒に考えてみましょう。

高校生が感じる、男女共同参画

みなさんは日常生活において、男女の違いによる格差や差別を感じたことはありますか。市内に通う高校生(10名)に、身近なところ(進学時・就職時)で発生した男女差別問題をテーマに、どう感じたか、どう対応していけばいいかなどの意見を出し合ってもらいました。様々な意見が出たため、意見の一部を掲載することとなりました。詳しくは、市ホームページに掲載しています。

URL <https://www.city.marugame.lg.jp/itwinfo/i35778>



令和元年度 川柳コンテスト
受賞作品をご紹介します

「職場・学校・地域の中の男女共同参画」をテーマに令和元年6月3日から9月2日にかけて、川柳を募集し、298点(178人)と多くの応募を頂きました。ここに最優秀賞と特別賞の作品をご紹介します。 ※年齢は、応募当時

最優秀賞

【エピソード】 テレビなどで、育児をする男性としてとりあげられることが最近よくありますが、なぜなのかなと思ったのがきっかけです。では、なぜ女性が育児をしても話題にならないのか、それはしてとせんと世の中が思っているからではないかと考えました。 牧野 剛志さん(18歳)

イクメンと
もてはやされるが
してとせんと

特別賞

(男女共同参画審議会会長賞)

【エピソード】 子どもが熱を出して帰るのも帰りやすいのも女性です。男性は休みを取るつもりもないし、職場の人達も男性が休むものと思ってないから休みが取りづらい。 高橋奈央子さん(34歳)

有給が
なくなるママと
減らぬパパ

編集後記

某大臣の育休に賛否両論ありますが、なかには、政治の世界は速くて分からないという人もいるのではないのでしょうか。そんな時は、職場の上司や学校の担任等の身近な人に置き換えてみてはどうでしょう。案外、政治や育休を身近に考えるきっかけになるかもしれませんよ。(T)